

技術と社会の関係求めて

人生の みちしるべ

リスク研究

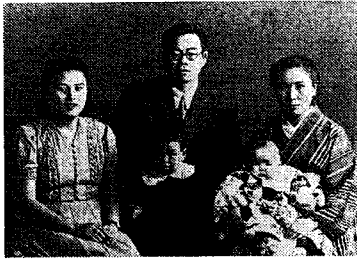
中西 準子

②

(産業総合研究所
安生科学研究部門長)

—どのような幼少時代を過ごしたのでしょうか

南満州鉄道調査部員だった父は共產主義者で、よく家で何人かと議論していました。記憶にはないのですが、3歳ごろから父の後ろで夜まで議論を聞いており、議論が終わりと見ると私がいる、という感じだったそうです。中高生のころはよく父の手伝いでデータを調べたりもしました。



1941年、上海にて家族と。前列左が中西さん(写真は本人提供)

戦中に逮捕された父は戦後すぐ釈

放され、日本共産党の再建に力を注ぎました。その後路線対立から党を離れると、出版なども妨害され、収入もない。ここまでやるのか、と思いましたが、

その時は中学生で、父の話が正しい気がするのですが、相手の人の言い分も分かる。思いつて難しいな、という感覚でした。

—大学で化学系に進もうと考えたのはなぜですか

高校のクラブは社会科学研究会、日曜には東大の経済学部生と勉強会をし、社会科学に興味がありました。でも高2ごろになって、明るい色の化学繊維の服が出回り、世の中全体が明るくなるのを見て、化学技術にはマルクスと違う何かがあると思ったのです。社会主義ではなく、化学工業が世の中をよくしている、と感じました。化学の勉強はむしろ嫌いでしたが、応用化学を学ぼうと横浜国立大学工学部に行きました。

そんな理由で入学したので、蒸留塔の設計とか、個別の技術の授業ばかりで社会との関係など分からないのがつまらなくて、就職は文系と思っていました。公務員試験も受けま

したが、ダメでした。当時はまだ公表されていた2次試験までの順位で15位だったので、3次試験の面接で落とされたとはっきり分かりました。本当のところは不明ですが、面接のディスカッションでも褒められていたので、父が共産党の幹部だからではないかと。卒業研究が評価され、東大と東工大の大学院から誘いがあったので、就職もないことだしと東大院に進むことにしたので

す。

修士2年でも文系就職を考えましたが、これもダメ。博士3年では証券会社系の研究所を受けたら「ぜひ来てほしい」と言われましたが、条件は顧問職にすること。当時、女性社員はみな営業職で30歳以降昇給が

なく、院卒で30目前で入社して、給与を上げると、ほかの女性も上げなければならなくなるのでとのことでした。全女性社員とは別に、私だけ好待遇なのも嫌で、断ってしまいました。

—指導教官からポストを紹介されなかったのですか

教授からは共産党をやめないと、就職は紹介できないと言われました。父のこともあり、教授は私を共産党員だと思ひ込んでいたのです。そんな就職差別はおかしいと思い、自分は、共産党員ではないとも言いませんでしたから、教授からの仕事の紹介もありませんでした。

もう、卒業間近という時になって、研究室の助教が、都市工学科で助手のポストが空くという情報を持ってきました。そして、工場排水の本を3冊渡されました。当時の私は工場排水が川を汚すことも、公害という言葉も知らなかった。全く新しい分野でしたが、社会とつながっていることに感動し、その助手になりました。元から技術と社会の関係を知らなかっただけで、応用化学自体にこだわりもなく、なんでもするという気持ちでしたから。

これで、環境問題に入るようになりました。その助教の友人が、宇井純さんだったのです。

(聞き手・菱山哲平)